

---

# ツキの子

高峰 歌歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツキの子

### 【Nコード】

N2286K

### 【作者名】

高峰 歌歌

### 【あらすじ】

変わりたい……。そんな思いを内に秘め、きっかけを求めさまざまなものに取り込む少年。そんな彼の前に、突然現れた少女。「いいきっかけ、持ってきたわよ」  
不幸体質の少年とツキをもたらす少女が、作る幸せ求めの物語。

変わりたい……。

監視中・・・

三月二日

「あっ　　！！」

やっと、見つけたわ。ホント探すのはいつも面倒なのよねえ。  
って、まだ『二人』しかやってないけど……。

「さてっ。その二人目さんはっつと、おお」

見事なまでのグレーです。黒とも白ともとれない、それはもう美しいほどの真グレー色です。

一体、どうしたらあんな不幸体質になるのだろう？　……神様に嫌われてるね、アレは。

「けど実際、どのくらい不幸なのかしら？」

じーーーーーーーーん…………。

……ピンッ！

「決めた、少し観察してみよう！」

敵を知ることが大切なことだもんね。

うんうん。我ながら賢い。

期間は、まあ飽きるまでって事でOK。

「よしっ！ それじゃ張り切って、レッツストーキングー！」

あぶない発言を大声で発する一人の少女。

彼女の視線の先には、真グレイオーラを纏う少年が歩い　。

ガッツ。　（足を引っ掛ける音）

「わっ！？」　（真グレイの子の叫び声）

ドシャンッ！！　（地面とキス？をする音）

歩いていた。

「これは…長引きそうね……」

あまりに情けないグレーを見て、ふっとため息を一つ。

といいつつ、少し顔がにやけている。

「しかし、あれは……フツ、フツ （笑）」

とうとう耐えきれなくなり、あははっと一人大笑いしだす少女。

なんでもない所で……ふふつ、とお腹を支え、目から涙を出す始末。

どうやらこういうベタな展開が少女のツボらしい。

「っ……あははっ!! あはっ!! は って、アレツ？」

先ほどのグレーの子が、居ない。

「あっ あああ!!!!」

少女が大笑いをしている間に、どこかに移動したようだ。

「私の許可なしに勝手に動くなー!!」

メチャクチャな発言をして走り出す少女。

こんな感じで、しっかり観察できるのだろうか？

幸先不安な感じで、グレー子の監視が始まった。

監視中・・・（後書き）

とりあえずの一作目です。

何度か（改）することもあるかもしれませんが、よろしく願います。

色がつく日(前書き)

榎本 拓也視点です。



## 色がつく日

それから、一月の月日が流れ

四月三日

8

桜が満開のこの季節。

満開に咲く桜、フラリフラリと風に乗り、散りゆく桜もまた美しく。

芽でる桜におはようと、散りゆく桜にまた来年。あした

人の人生、桜とともに。

共に祝おう。新しい出会いを。

by 拓也

「うん、駄目だな」

即興で思い浮かんだ言葉を並べてみたが、いまいち詩っぽくない。

やっぱり、難しいもんだよな。

右手でページの間に親指を挟み、詩集の本を読み歩く。

先ほどに詩？ を見てわかるように、僕が素人だということはすぐわかる。

「はあ」

自分の情けなさに、まわりのテンションをさげるくらいの深いため息をつく。何も無い自分をなんとか変えるため、趣味探して2か月が過ぎた。

その成果はもちろん惨敗。4戦4敗、まだ1勝もしていないです。

「……………はあ」

これで5戦5敗。いまだ勝利せず。

ほんと……………趣味ほしいなあ。

えのもと  
榎本 たくや 拓也 高校1年生

容姿、並。

スポーツ、並？

成績、並？

一日に食べる量、並。

とにかく並が似合う子で、本当にどこにでもいる少年である。

特に趣味も無く、普通？ の日常を過ごす少年である。

彼が趣味を探す理由は二つ。

一つは、こんな日常を変えたくて、趣味を探している。彼が趣味探しを始めたのは高校入学前の春休み。

中学時代、特に目立つことなく過ごしたが、高校生になったら自分を変えようとひそかに考えていたことだった。けっして高校デビューではない。

そしてもう一つ、むしろこちらがメインだ。

それは。

カキーーーーン！

「あつ！！？ あぶなーーーーい！！！」

「わお！！」

気持ちのいい音の後に、河原で草野球をしている少年たちの声。少年たちががこちらを見て叫んでいる。………わお？

つと。どうやらボールがこっちに飛んできているみたいだ。いつもどおりに……。

僕は、飛んでくるボールを見向きもせず、スツと当たり前のようにそれをかわす。

「うわっ、すげっ……!!」

「いま……ボール見てなかったよな？」

「……………チッ！」

ちっ？ またどこからか舌打ちが聞こえたような……？

まわりを見渡すが誰もいない。

僕はコンクリートにころころと転がるボールを拾い、少年たちに投げかえす。

「すっ、すいませんでしたー！」

「気をつけて」

「つまんなーい」

まただ、さっきから女の声があるが……。それもかなり不謹慎な発言をするやつが……。

「まあ…いつか」

不謹慎なことを言われてた気がするが、僕のことじゃないだろ。多分……。

「けど……はあ……5回」

本日5回目……。

今日だけで少なくとも5回、不幸なことが起きた。

もちろん、今のが何十年に一回あるぐらいなら、不幸ではなく災難だと言える。

が、僕にとってこれはもう日常である。むしろ、まだまし。

普段はもっと……思い出すだけで悲しくなる。ボールが飛んでくることくらい日常茶飯事。当たり前だ。

けれど周りはいつも言う……。

「おまえ、ツイてねえな」

自覚はある……けどそれを他人に言われると少し傷つく……。

「拓也、あんた神様に嫌われてるのよ?」

姉に言われた言葉だ。

身内に言われるともっと傷つく……。

僕だってちゃんと周りを見ているつもりだ。

けれど、気がつくとも財布がなくなっていたり。(落とした)

玄関のカギをなくしていたり。(これまた落とした)

ツイてないことだらけだ。

ちなみに今も財布はない……。 (馬鹿なだけでは?)

「はあ……」

嫌になつてくる。

この世に僕以上にツイていない人はいるのだろうか。

僕はその場に座り込み、顔を伏せた。

いつも考える。

周りと自分の運の違いを……。

「どうしてこんなにツイてないのだろう」

どうして……。

「ハッ!? いやいや、今さらくじけちゃだめだ」

そうだ。自分を変えれば少しはマシになるっ。はず!!

そのために、変わらない日常を過ごすだけではなく自分から動かないとっ!!

趣味探しも自分を少しでも変えようとする彼なりの第一歩だ。

重い腰を上げ、うーんと伸びをする。

「よーしっ!!」

気合十分、この不幸体質を取り除くためにまず前進だ!!

「ムリムリ、あんたもうグレーだもん」

そうだ……グレーな僕なんかが。

「んっ?」

グレー?

誰だいきなり失礼なことをいう奴は……。

そう思い、後ろを振り返ると……。

「やっほ」

目の前に女の子が笑顔で手を振っていた。



## 色がつく日（後書き）

拓也のプロフィールに？がついているのは、本人が並だと思っ  
ているからです。実際には、かなり優秀な子ですので……多分。

……きつと！……。

なぜ？　そして、誰？

時間は少し前に戻って

「あらら、どうしたのかな？」

さっきはボール避けて決まっていたのに、みるみる落ち込んで

「あつ、タメ息」

タメ息は運気を逃がすのに……もったいない。

「ん、そろそろいいかな。飽きてきたしっ」

これ以上落ち込む前に、救ってあげますか。

「さて、いいきっかけを届けてやりますか」

そういつて、少女は落ち込む少年に向かう。

---

---

そして現在。

「まっ、グレーだし……ツキが無いの」

なっ、なんなんだこの子は……？

「わかる？ あんたには、もうツキが残されてないのよ」

いきなり目の前に現れた女の子。

「だから不幸なのは、あたりまえ」

突然僕の目の前に現れ、僕と同じ十六歳くらいの少女。  
いきなりワケのわからないことをいう少女に、僕は  
可愛い。

そう思ってしまった。

長くウェーブのかかった金色の髪。

小さい顔に少し釣りあがった青い瞳で僕を見る。

身長160cmくらいで、一見幼い雰囲気を持つ可愛い女の子。

だがその透き通るような青い瞳が、彼女を綺麗にも魅せる。

こんな可愛い子、見たことがない。

そんな女の子に……。

「いままで見てたけどホントに悲惨だったわねえ」

メチャクチャ同情されています。  
つか、今まで見てた……？

「そんなあなたに、い・い・ニユ・ウ・ス・が！ ……聞きたい？  
聞きたいよね？」

なんなんだ、いったい？

「じゃーん。あなたのツキを元に戻す方法を教えてあげる。どう？  
いいニユウスでしょ？」

どんどん自分のペースで話す少女。  
だめだ……ついていけない……。  
ツキがないのはもう日常だけど、これは今までにない非日常的なこ  
とだ。

「きみは……いったい……」

僕は混乱しながらも、なんとか状況を理解しようとした。

「えっ？ああそっぴや自己紹介まだだったね。ゴメンゴメン」

よし、まずは一つ一つ、疑問を解消していこう。

「私はクスミ。クスミ・フローライト。見ての通りかわいいツキの

子よ」

「ツチノコ!!?」

「ツキの子!!!!」

だめだ、理解できねえ。

一つ一つ解消してどころか、とんでもなくでかい疑問が出来てしまった。

とりあえず、最後の方は聞かなかったことにしておこう。

「それでクスミさんは「クスミでいいわよ」……」

彼女の顔が不機嫌になる。

どうやらクスミは、他人行儀なことが嫌いみたいだ。

けど、初対面で女の子を呼び捨てにするのはちょっと恥ずかしい……。

「クスミさんは「クスミ!!」はい……」

怒られた。

「まったく」

クスミが呆れたように呟く。

そして、髪をかき上げ一言……。

「これから一緒に住むのだから他人行儀はおかしいでしょうに」

「……はっ?」

なんですと……!!?!

なぜ？　そして、誰？（後書き）

名前が全然決まらなかったことに涙を流しました。（話は大体できてるのに……）

いろいろ考え、あらためてセンスのなさにまた涙なみだ

普段、皆さんはどんな感じで名前を決めてるんでしょう？

一風変わった名前でも、読みを終わるころにはこの名前イイっ！！  
てなるんですね。不思議です……。

やじつやじつ……。

「いつ……今、なんて……？」

「？……他人行儀はおかしいでしょうに？」

「じゃなくその前!!」

「これから一緒に住むのだから？」

「それ!!!!」

とんでもないことをサラリと言いやがった……。

突然現れ、唐突なことをいう少女……もといクスミ。

いきなりありえない展開に頭を抱える僕に、クスミが不思議そうな顔で見つめる。

「なにかおかしなことでも？」

「おかしすぎるだろ!? なんで一緒に住むんだよ!？」

「あなた、自分のツキを元に戻したくないの？」

「取り戻したいです」

「じゃ決まり」

「STOP!! 落ち着け!! ちよつと待て!!」

どう考えても怪しい……。

初対面でいきなり一緒に住むなんて……。

ハッ!? まさか新手の詐欺!? なんてこった!!

僕のツキの無さがついに新手の詐欺まで生んでしまうなんて……。

「もしかして詐欺じゃ…… なんて、思ってるでしょ？」

なっ!!!? 読まれているだど!?

「くっ!! 最近の詐欺師は、読心術まで心得ているのか!?!」  
「ないない、そんなの。というか詐欺じゃないから……」  
「でも」「でもじゃない!!」 ひっ!!?」

きよ「恐喝でもない!!」 また心を読まれた!?

「つたく、私を詐欺師として話をすすめないで」

「そう言っつて、みんなを騙してきたんだな!?!」

「し・て・ま・せ・ん!!!!」

クスミが目を吊り上げ、僕を睨みつける……。

「あなたに拒否権はない!! いいわね!!?」

あまりの恐さに、僕は……。

「はい……。」

としか言えなかった。

「とにかく、これだと話が進まないから、今は納得しなさい。  
…わかった?」 …

そう言われてもなあ……。

「返事!!!!」

「はい!!」

「わかったらさっさと連れてって」

「? ……どこに?」

「あなたの家に決まってるでしょ!!!!」

「はい!!!!」



はいって……言っちゃった~~~~!!!!

「よろしい。いくわよ」

ああっつ。家族にどう説明したらいいんだ~~~~。

やぶえ……。(後書き)

やぶえ……。家まで書けなかった……。

## ツキの運び方

「ところでクスミさ……」

チラッ。

「クスミは……何者なの？」

「コ〜」。

あぶないあぶない……また怒られるところだった。

「よろしい」

なんとか言いなおせた僕にクスミは笑顔で答えた。

「さつきも言ったけど、私はツキの子よ」

「だからそのツキの子ってなにさ？」

まだ出会って1時間位だけど、クスミは悪い子ではないと思う。けれど、言っていることが全く分からない。

「ツキの子はツキの子なのだけ……そうねえ……」

「う〜ん」と首を捻りながら唸っている。

クスミもうまく説明しようと考えてくれるようだ。

クスミの言葉がまとまるまで、僕はだまって彼女を見つめていた……。

それにしても……かわいい子だなあ。

全体的にかわいい雰囲気をしているが、ストレートの金髪が、とても綺麗で、思わず見惚れてしまう。かわいいと綺麗、矛盾してるようだけど、どちらも、クスミにはぴったりな言葉だ。

「目がいやらしいのだけど……」

「へっ？」

いつのまにかクスミが僕を見ていた。ううう／＼／＼／

恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になる僕に追い打ちをかけるように。

「まあ男の子だし」

穴があつたら入りたい……。

「そ……それよりも、まとまったのなら説明してくれ!」

恥ずかしさのあまり、つい声を荒げる。

そんな僕を見てクスミは「まあまあしょうがないよ、男の子だしね」と

くすくす笑いながら言った。

「詳しくはあなたの家で話すことにして……一言で言つたら私は…

…」

「座敷わらしよ」

「……はっ？」

まったく理解が出来ない。座敷わらし？この子が？

「まっ、正確に言うと座敷わらしとはまた違うのだけど……」  
「違うんかい」

じゃなんで座敷わらしで例えた。

「違うのだけど、根本的なことは一緒よ」  
「根本的なこと？　なんだよそれ」  
「ツキを運ぶことよ」

ツキを運ぶ？　幸運を運ぶということか？

「それじゃ座敷わらしと同じじゃないか」

座敷わらしが住む家には、富と幸運がもたらされる。

これなら、クスマが家に住み込むという理由も納得できる。

「けど、私と座敷わらしに違いがあるのよ」  
「違い？」

僕の前を歩いていたクスマが、振り返り言った。

「ツキの運び方が全く違ってる」と

## ツキの運び方（後書き）

背景や人の動きや動作表現ができない（涙目）  
頭の中では、妄想できても言葉が出ないです。 わかりにくい言葉が  
多いと思いますが、頑張つて直していきます。 ・ ・ ・ ・ ・ いつか、  
きつと。

ゆっくりとね!

「ツキの運び方?」

「そつ、ツキの運び方」

いったいどう違うというのだ。

「詳しくは家に着いてからって言ったでしょ」

「ツキの運び方だけでも……」

「ダメ、説明が長くなっちゃうから」

そついいながらクスミは、どんどん先へ行く。

「それよりあなたの家って、こつちだっけ?」

「うん、ずつとまつすぐいってそのあと……」

「右に曲がればいいわけね」

「うん、って何で知ってるの!?!」

「見てたって言ったでしょ?」

「て、言ってもほんの1月前ぐらいからなんだけどね」とクスミが少しはにかみながら言った。

そついえば、そんなことも言ってましたね。色々ありすぎてつい忘れていた。

「なんで僕を見てたの?」

「えっ?」

クスミが顔だけこちらに向けて答えた。



「だって、面白いだもん」

「はい？」

面白い？ 僕が？

「不幸がおきるたびに慌てる君を見ると……可笑しくて（笑）」

そう言うと、クスミがお腹を支えながら笑いだした。

「ひつ、人の不幸を見て笑うなんて最低だ」

「ゴメンゴメン、でも君も悪いのよ」

「なんで？」

「あんなに可笑しなりアクションをするんだもん」

ひでえ……確かに可笑しなりアクションをしてたかも……。

けど、あれだけ不幸続きならアクションもオーバーになるよ。

僕は、その場にいられなくなりクスミの前を速足で歩いていく。

「あ〜〜ちよつと!！」

クスミも速足で歩く。

「ゴメンって、ねっねっ？」

……。

「だから、私があなただのツキを取り戻してあげるから」

……。

「あなたがなんで不幸なのか？ 知りたくないの？」

ピタッ。

ドン！！

「ぬえっ！！？ いったっくい。いきなり止まらないでよ」

「なんでだ？」

「なにが？」

「なんで僕が不幸なんだ？」

「フツフツン。ようやく、食い付いたねえ」

すると、クスミがクルクルと僕の前に回り込んだ。

「それは……家に「じゃな」ふあああ！！？ まってよ……！！」

僕は、クスミを置いてその場を走り去った。

「置いてかないで……！！！！」

クスミも負けじと追いかける。って、はやっ！！？

クスミを撒こうと僕も全力で走った。

「ん……っ、とりゃ！！！！」

とりゃ？なんだ今の声？

ヒューーン……。

「ま……ずい……！！？」

何かが飛んでくる!!

「トウツ」

僕は、直感で飛んでくるものを避けた……。

ヒュン……。

クスマミが投げたものがそのまま電柱にぶつかり……。

パ　　ンツ!!!(石の碎ける音)

「ああ~~~~!!?　避けた~~~~!!」

「あたりめーだ!!　殺す気か!!?」

こんなのが直撃したら……。

「ふう、追いついた」

「なっ!!!?」

しまった!!　あまりの恐怖につい立ち止まってしまった。

「さっ、今度こそ行きましょ。ゆっくりね……」

ゆっくりという部分がやけに強調されていた。

かわいい顔で話してはいるが、声が全くかわいくない……むしろ怖い。

「はい」

その目に圧倒され、僕はしぶしぶ彼女を家に案内した。

ゆっくりとね！（後書き）

移動ペースが上がらない……。なぜ？

忘れないでっー!!

「ここだよ」

「近くで見ると、けっこう綺麗な家ね」

「そりゃどうも」

しかし、僕は別の事で驚いている……。

クスミに捕まった後、何事もなく我が家に着いた。

こんなの……初めてだ……!!

家に帰るだけで、何事もないのが普通なのだが、僕にとっては感動すべきことだった。

学校から、家に帰るだけでも必ず何かトラブルに遭う。

そんな僕が、トラブルに遭わないなんて……感動した!!

「これって、クスミがいてくれたからなの!？」

「ポリポリ……んっ？」

クスミがポテチを食べながら（いつ買った？）答えた。

「んっ……ああ……ポリ……そんなの……ポリ……普通の……ポリ……人……」

「すみません、食べてから話してください」

パリポリ……パリポリ……。

「くはっ……うん、この味気に入った」

よほどポテチが気に入ったのか。今までで一番の笑顔を見せている。でも、コーラ味はちょっと……舌大丈夫ですか？

「で、さっきの質問は……」

「えっ？ ああっ、そんなの普通の人なら日常でしょ？」

「……はい？」

えっ？ どゆこと？

「トラブルに遭うのが僕の日常でして……」

「今日はたまたまトラブルがおきなかっただけじゃない？」

「だから、それはクスミが……」

「……はあ？」

哀れな目で僕を見るクスミ……。

そんな……。

「……」めんなさい

思い切り同情されました。

「そんなことより、はやく開けなさい」

同情タイム短っ……！

「ほらほら、はやく！」

「わかったよ」

しかし、僕が玄関のドアを開けようする前にカチャッとドアが開い

た。

「たくつ、玄関前で何騒いでんの？」

「姉さん、いたの？」

ドアを開けたのは榎本<sup>えのもと</sup> 明美<sup>あけみ</sup>、1つ上で、俺の姉さんである。

「どうせまた、鍵なくして泣いてたんでしょ？」

「ちっ、違っよー!!」

「ほ〜〜う、この前、鍵をなくして、私が帰るまで、玄関前に小さく座ってたのは、誰かなあ〜」

「うっ!?!?! …… 僕です」

「素直でよろしい」

うんうんと、満足げにうなづく姉。

「ほら、さっさと入りなさい。カゼ引くわよ」

「うん」

僕は、家に入っていく……。

「置いてけぼりか、コラ!?!?!」

はっ!?!?! …… クスミの事、忘れてた

忘れないでっ!!!(後書き)

ただいまブラインドタッチの練習中……………。  
……………どっでもいっすね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2286k/>

---

ツキの子

2010年10月19日03時38分発行